

『アッシジの聖フランチェスコ』

Jacques Le Goff, *Saint François d'Assise*,
Paris, 1999.

三 邊 マリ子

ル・ゴフの、聖フランチェスコについての諸論文が、一本の伝記を構成する形でここにまとまった。本書は実に二つの点から興味深い。まず、フランチェスコ研究という観点からいえば、完全に俗人の手によるものであるということである。フランチェスコは、せまい意味でのキリスト教社会におけるばかりでなく、広く人類史における重要人物であると認められるが、その研究はしばしばキリスト教徒、特にフランシスカンによって占められがちであり、その個々の質の高さや多様性は疑うべくもないものの、全体としてながめたとき、そこに一つの枠を感じて物足りなく思うことも少なくない。しかし、このジャック・ル・ゴフは、あらためて紹介するまでもなくフランスを代表する中世史家であり、同時に、キリスト教に対する、きびしくもバランスのとれた批判者でもある。従来のフランチェスコ研究に敬意を払いつつもとらわれないその自由な研究が、俯瞰しやすい一冊の本にまとまったことは、まことに喜ばしいことである。

一方、日本にもファンの多いこの歴史家の研究事績としても、本書は興味深い。著者は、近年、フランスの聖人王・ルイ9世を題材に「全体的伝記」に取り組み、これを、1996年、大著 *Saint Louis* として Gallimard から出版した(『聖王ルイ』, 新評論社, 2001年)。その序論で著者はこう語っている。歴史学が見直しの時期をむかえている今、伝記は歴史家にその職分・領域について考え直させる有効な展望台となりうる。ところ

で、伝記を書くということはグローバルザン（全体を構造的に一つの意味あるものとする）の主題として一人の人物をおくということであるが、逆にグローバルザンの軸として人間以上に具合良いものを考えることができるだろうか、と。「全体的伝記」は、政治事件中心の従来歴史学に対して人間の日常の生と社会の全体構造に着目した新しい歴史学、すなわち「全体的歴史」を提唱したアナル派の第三世代である著者の、研究の一つの集約点であるといえる。

ところで、その調査結果に伝記という形式を採用することを著者に決意させた聖ルイの条件の多くは、フランチェスコにも共通している。たとえば個性の13世紀に生きたこと、聖人であること、「経済的なもの、社会的なもの、政治的なもの、宗教的なもの、文化的なものすべてに関与し」「それらすべての領域で具体的に行動し」たこと、など。しかし、かたやヒエラルキーの頂点たる一国の王、かたや最下層に留まりつづけた一貧者と、対極的な位置にあるこの両聖人は、上記領域への関わり方も正反対である。著者の関心からいえば、聖ルイを通した上からの視点では飽きたらぬ点も多かろう。本書の序文で著者は語る。「歴史的人物としての性格としても、私の記念碑的な取り組みとしても非常に異なる『聖王ルイ』に、私の伝記のころみの主要素をつぎ込んだことに満足せず、私はフランチェスコにささげた一連の文章を出版することを決意した」。

では、中身の紹介にうつろう。第一章「封建世界の刷新と停滞の中のアッシジのフランチェスコ」は、フランチェスコの生きた13世紀の聖俗社会が、11世紀以来の経済発展および都市化をうけて刷新と停滞の間で揺れうごいており、そうした時代状況に刻印づけられて聖者の生涯もあることを簡潔に示す。第二章「本当の聖フランチェスコを求めて」では、まず、聖者の姿を追う上で重要な本人の書き物およびフランチェスコ伝の問題が考察される。これら史料には、散逸や真正性の問題等、中世史料に共通する難しさに加え、史料の性格に反映される兄弟会の政治的状況、特に厳格派と穏健派の対立の問題がある。各史料を吟味しつつ、ル・ゴフは問う。「厳格派と穏健派の間の、どこに本当のフランチェスコは位置づけられるのだろうか」。この問いに答えるように諸史料から聖者の生

涯とところざしが浮き彫りにされ、最後に《聖フランチェスコは中世的か現代的か》との問いのもと、改めて聖者の行動・立ち位置が歴史的文脈に照らして考察されるのである。

以上の二章が基部となり、つづいて大きくフランシスカンを視野に入れて更なる分析がなされる。第三章「アッシジの聖フランチェスコの作品および13世紀のフランチェスコ伝にみられる社会階層の語彙」では、当時の社会層の語彙・図式とフランシスカン史料におけるそれとが比較検討され、階層化された一なる天上世界と混乱し多層化した地上社会、そして両者の仲介者となるべき、家族モデルに基づくフランシスカン社会という、聖者の世界理解と理想とが浮き彫りにされる。最終章「フランシスカンと13世紀の文化モデル」では、当時と今日の「文化」分野の違いや、聖者の理想と兄弟会の動向のずれに留意しつつ、13世紀の文化モデルの目録が作成され、それに照らし合わせてフランシスカンの伝導ビジョンが見定められていく。そして結論として彼らは、ヒエラルキー下層部にこそ範型を見出しうる共同体的悔悛的態度をもって人類のすべてが救われるべきことを説き示したのであり、それは飢餓、貧困、抑圧の悲劇がなくなる限り、今日の世界においてなお生きつづける教えであると結ばれるのである。

以上に見たように、各4章は構図としては共通したものをもっており、個々の指摘にも重複する点が少なくない。また、社会の全体構造との関わりにおいて対象を論じるというその性格上、ぜいたくに散りばめられた興味深い論点も「くわしくは踏みこまず指摘だけ」に留められることが多い。このため、通して読んでみると少々あきてくる、あるいは物足りなく感じるといった難は否めない。しかし、これは、もともと同じ関心のもとに書かれた、それぞれ独立した論文から成るという本書の成り立ち、およびテーマの大きさに対して与えられたページ数の少なさという制約上、仕方がないことであろう。

さて、第二章タイトル「本当の聖フランチェスコを求めて」は、本書収録に当たってあらたに与えられたタイトルであるが、全四章をつらぬく基本テーマでもある（なお、原題は「アッシジのフランチェスコ」である）。史料問題と密接にからみ合ったこの問い、いわゆる「フランシス

カン問題」は、19世紀以来の近代フランチェスコ研究の、常に基底を成してきた。この根本問題に、著者はまさに真正面からとりくんだわけであるが、では、著者は本当のフランチェスコを見つけたのであろうか。本書に描かれたフランチェスコは、あくまでも歴史的であり中立的である。少なくとも、可能な限りそうあろうとしている。たとえば第四ラテラノ公会議をめぐる聖者とローマ教会の関係であるが、著者は、公会議の四年前の、'原始会則'の認可を願い出た兄弟たちに対する教皇らのぞんざいな扱い、口頭のみでの承認、そしてそれに対する聖者の憤りなどを伝える初期史料をかんがみれば、しばしば検証ないまま自明とされる聖者の公会議への出席も疑わしいとするが、他方、教皇と聖者は、広く人類に目を向けこれを救わんとしたその理想において、スタイルこと違え確かに一つ精神のもとにあったのだ、としている。本書のフランチェスコは全体にローマ教会に対して敬遠的であるが、しかしこれを従来の聖者像に対するアンチ・テーゼとしてうち立てるのではなく、あくまでも平等に史料に接したときに見えてくる可能性として提示するのである。こうして描かれたフランチェスコは、派手ではないが興味深い。

しかし、では、これが「本当のフランチェスコ」なのだろうか。そもそも「本当のフランチェスコ」とは何だろうか。著者は、自らのこころみが個人的解釈、すなわち「私のフランチェスコ」を逃れ得ないことは初めから認めている。といて、歴史家が復元可能な「客観的現実」など所詮あり得ないとする、あの不可知論的な歴史観に組みするわけでもないだろう。著者の意図はどこにあるのか。

こういうことではないだろうか。すでに散々見たように、著者にとって人間とは、時代背景から切り離して語りうるものではなく歴史のダイナミズムの中でこそ問題にしうるものであり、そして歴史とは、過去の一時代を切り取ってすむものではなく我々の現在・未来をも問題とするものである。さらに、それは著者一人のうちに完結するものではなく、そこには読者が想定されていなければならない。著者は『聖王ルイ』でも《聖ルイは実在したのか》との問いを立てているが、この問いを自伝 (*Une vie pour l'histoire, La Découverte, 1996* / 『ル・ゴフ自伝 歴史家の生活』, 法政大学出版会, 2000年) でこう敷衍している。「聖ルイは歴史家にとって、さらに人物像を表現し、できるなら蘇生させ、説明す

る歴史家の一般読者にとって、存在しうるか」。

堅実な手法によって描き出されたル・ゴフのフランチェスコは、しかしこれぞ真実と押しつけられる種類のものではない。「本当のフランチェスコ」は、おそらくその先にある。フランチェスコ自身、確固たる信念を持ちながら、あくまでもこれを、人との、社会との、時代との交わりの中に表していったように、「本当のフランチェスコ」も、真摯にこれを求める著者と読み手との交わりの中にこそ求められるのではないか。「本当の聖フランチェスコを求めて」は、著者の歴史家としての視野・姿勢をも総合的に表すタイトルであると言えるだろう。この意味でも、本書は広く読まれるべき良書であると思う。